

夏の記憶

岩花陸

蝉が鳴いている

警笛は聴こえず

ホーム一面に咲き乱れた赤

命色の彼岸花の園へ

その中に佇む安楽椅子へ

そっと腰掛けて声を待つ

錆びついた駅

色褪せた青写真

台風は進路を変えたらしい

嫌味に澄んだ空だけが、ただ

その色を未だ残している

線路を満たす水面へ

気まぐれに視線を落とす

反射した太陽と月

その中を泳ぐ金魚の群れ

桜の花びらは水底に沈み

絵の具になったようだ

もう詮のないこと

焼けるような日照りだけ明瞭で

他のものなんて全部曖昧で

境界線をあんなに嫌ったのは

他でもない自分だったのに